

研究ノート

テーブルウェアのための加飾技術の開発

山田 圭*¹

Development of Decorating Technique for Tableware

Kei YAMADA*¹Tokoname Ceramic Research Center*¹

常滑焼製品の加飾技術について、陶磁器製品のみならず、繊維製品や金属製品、木工製品など様々な製品や、アール・ヌーボー、アーツ・アンド・クラフツ運動などの美術・デザイン運動を対象に調査を行い、得られた成果を用いて、常滑焼製品の新たな加飾技術の開発を行った。本年度はポスト・モダンからデザイン要素を抽出し、新たな加飾技術の開発を行った。これを用いてテーブルウェアのデザイン設計を行うことにより、ユニークなテーブルウェアのデザイン開発ができた。

1. はじめに

常滑産地は、事業主一人または家族で製品作りを行っているメーカーが多いため、技術が変わることなく受け継がれ、新たな加飾製品が創出されにくいという一面がある。また、新たな製品企画を試みる余裕が無いとも考えられる。

そのため、本研究では、常滑焼製品の新たな加飾技術について、陶磁器製品のみならず、様々な製品や美術・デザイン運動を対象に調査を行い、得られた成果を用いて常滑焼製品の製造工程に適合させる加飾技術の開発を行ってきた。本年度はポスト・モダン運動のデザイン要素を抽出し、新たな加飾技術の開発を行った。

ポスト・モダンは合理性や機能性を追求したモダニズムに対する反発から生まれた思想で、1980年代に世界中を席卷した。片や、日本での1980年代はいわゆるバブル経済の時代で、かつて無い華やいた時代であった。昨今、テレビで1980年代を強調したCMが流れたり、バブルな話題を提供するタレントが持てはやされるのは、景気回復と言われながらも実感できない閉塞感と、合理性・機能性の追求に対するある種の疲労感があるのではないかと考えられる。こうした社会背景の一致から、新たなテーブルウェアのデザイン開発に、ポスト・モダンのデザイン思想を採用することとした。

皿や茶碗、カップ&ソーサーなどのテーブルウェアは、数ある陶磁器製品の中でも最も生活に密着したものであるため、手に馴染む形状、スタッキング性（積み重ねやすさ）、軽さ、清潔感のある色彩・絵柄、飽きのこないデザインなど、毎日使う道具としての実用性が重視されてきた。これまで、アーツ・アンド・クラフツ運動やアール・ヌーボー、アール・デコ、モダニズムなどのデザイン

運動がいくつもあったが、テーブルウェアのデザインには、実用性を考慮した絵柄のアレンジや、リムの加飾程度に抑えられたのではないかと想像される。

そこで本研究では、実用性の高い普段使いのものだけでなく、結婚式の披露宴やホテルでの食事、食品や食材のディスプレイ等に用いるプロユース用のテーブルウェアも視野に入れ、ポスト・モダンのデザイン要素を採用したデザイン設計を行った。

2. デザイン設計

ポスト・モダンのデザインは、装飾を排除したモダニズムデザインに対して機能を阻害するほどの過剰な装飾性や、量産品ではない一品制作的なハンドクラフト感が特徴である。このため、テーブルウェアに求められる実用性は必然的に犠牲となるが、加飾の程度により実用性を残すことも可能である。

図1及び図2に示したデザイン設計例は、加飾を少なくし、実用性を残したものである。完全なスタッキングはできないが、水平を保つスペーサーを用いれば、複数を重ねて収納が可能である。形状的にも皿の機能を阻害する要素をできる限り小さくしている。

図3に示したデザイン設計例は、仕切り皿を立体的にアレンジしたものであり、中央部、右部の突出は小皿として使用できる。なお、皿左の突出部分は単なる加飾である。スタッキング性については、このような高さのあるデザインは重ねて保管することは困難であり、考慮していない。しかし、突出部分等により面積的なロスはあるが1人用の皿として使用可能である。

*1 常滑窯業技術センター 材料開発室



図1 デザイン設計例① 石膏モデル

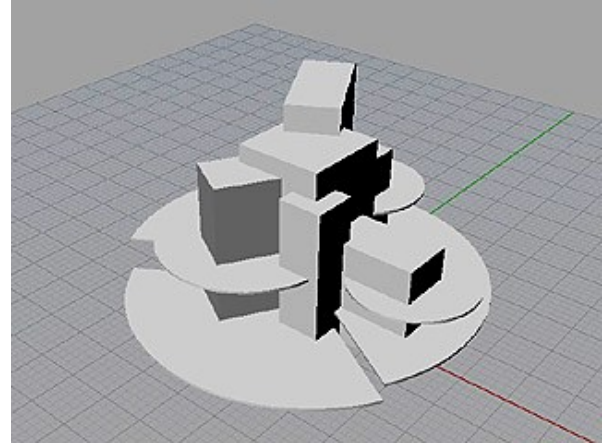


図4 デザイン設計例④

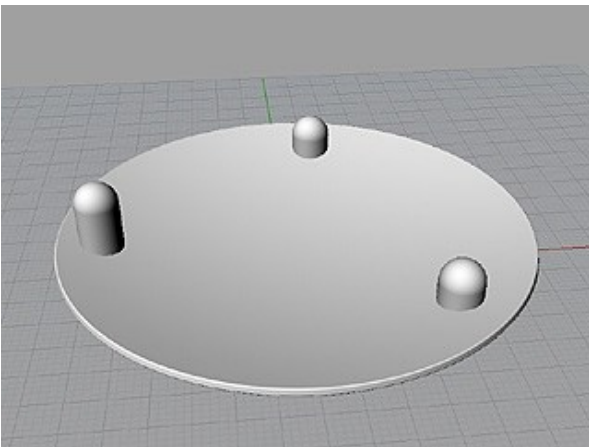


図2 デザイン設計例②

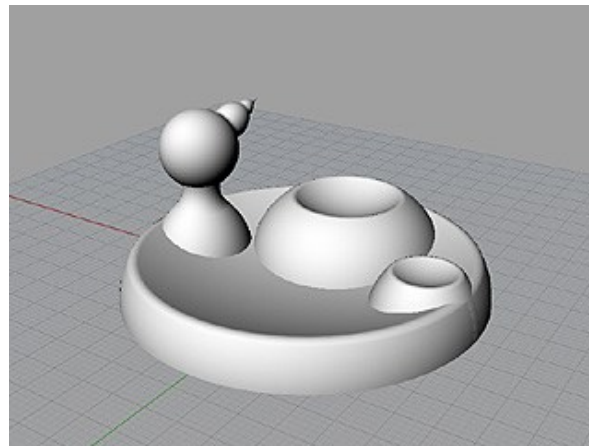


図3 デザイン設計例③

また、大皿として作成することにより、披露宴やホテルでの食事などに用いるプロユースの皿としても使用可能である。そうした使用ではオブジェのような突出部分がアイキャッチとなり、効果的である。

図4に示したデザイン設計例は、プロユースを狙ったものであり、一般家庭での使用は考えていない。

デザインコンセプトは「都市」であり、中央部の突出

部分は高層ビル群を、皿部はスカイデッキやスカイウォークをイメージしてデザイン設計した。円卓に配置し、立食パーティーなどあらゆる方向から料理を取るような使い型を狙ったものである。直径も高さも50cm超を想定している。

また、図2～図4に示すデザイン設計例②、③、④は三次元モデリングソフト（ライノセラ）を使用して作成したため、3Dプリンタによる出力データに変換することが可能である。現時点では窯業原料を用いた3Dプリントは、破壊強度、表面粗さ、出力サイズなどの面で実用段階に至っていないが、縮小データを用い樹脂等で成形することで、形状の把握は現状でも可能である。このような一品制作のものは成形が困難なうえ、陶芸作家の作品のような高額商品になってしまうため、3Dプリンタでの成形の意義が大きい。そのため、窯業系3Dプリント技術の今後の発展が望まれる。

3. まとめ

- (1) ポスト・モダンのデザインをテーブルウェアに採用することにより、これまでにないユニークな製品のデザイン開発ができた。
- (2) ポスト・モダンのデザインを採用したものは、一般的な皿や茶碗とは全く趣旨が異なり、一品制作のものであると認識する必要がある。
- (3) 一品制作によるもの作りは陶芸作家の作品作りと同様の手法であり、高額商品になってしまう。これを解決するには3Dプリントの導入が効果的と考えられる。今後、窯業系の3Dプリントシステムの実用化が望まれる。